

2021 年度 ソニー幼児教育支援プログラム
科学する心を育てる

「新しい園生活」を自ら築き上げる 5 歳児の姿



やってみよう！が あふれだす



学校法人 鈴蘭台学園

認定 こども 園

いふき幼稚園



目 次

はじめに・・・P1

1. いぶき幼稚園が大切にしている「科学する心」が育つための学びのサイクル・・・P2

2. 令和2年度5歳児そら組の実践事例より

2-1 新しい生活様式～with コロナって？から始まった1学期～・・・P4

2-2 コロナウイルスから始まった興味・関心の広がりとは2学期でも！・・・P10

2-3 3学期、1年間の集大成！そら組みんなの思いを形に！！・・・P16

4. まとめ・・・P19

5. 課題と展望・・・P20

やってみよう！があふれだす

キラキラ、ドキドキ、ワクワク。

うれしいも、かなしいも、くやしいも、ぜんぶ。

やってみよう！で あふれる場所でありたい。

さあ、今日も、思いっきり心をうごかそう！



はじめに

鈴蘭台学園の建学の理念「つよいこころ」「じょうぶなからだ」「やさしいきもち」

学校法人鈴蘭台学園は86年の歴史があり、健学の理念として「つよいこころ」「じょうぶなからだ」「やさしいきもち」を掲げている。3本柱のうちの2つが心に関するものであり、幼児期の心の育ちを重要視している。いぶき幼稚園はこの伝統を受け継ぎ、幼児期の遊びや園生活を通してこれらを育むことにより、心情・意欲・態度や思考力等の資質・能力を伸ばしたいと考えている。

鈴蘭台学園の教育目標「わたしは、わたし。でも、わたしはみんなの中のわたし。」と いぶき幼稚園の教育目標「自分で考えて、自分で決めて、自分で行動できる子」

鈴蘭台学園は、鯨岡峻氏（京都大学名誉教授）の言葉を参考にし、【幼児に「自己を表出する心」と「周囲と共に生きる心」のバランス感覚（自己調整力）を育むこと】、【保育者が「子ども個々が自分らしさを発揮し、それが生かされる集団作り」を実現すること】の2点を教育目標としている。

これに加え、いぶき幼稚園は園独自の教育目標として、「幼児期の主体性を伸ばし、自分で考えて、自分で決めて、自分で動ける子」を育てることが掲げられている。

教育・保育の方針（教育目標実現に向けて、保育者と保護者が一緒に大切にしたいこと）

1. 人とのかかわりを大切にしたい生活体験を積み重ねる。
2. 遊びを通した学びを大切にしたい。
3. 子どもたちが自らの意思・判断で遊べるように、豊かな環境を構成する。
4. 生きる力の基礎となる自己肯定感（自尊感情）を養う。
5. 家庭及び地域における幼児期の教育・保育の支援をする。

スローガン「やってみよう！があふれだす」

建学の理念や園の教育目標・方針を現代風に再定義し、子どもにも大人にもわかりやすくするため、2018年度中よりスローガン「やってみよう！があふれだす」を新たに掲げた。子どもの「やってみよう！」「やってみたい」という主体を大切にしたいだけでなく、保育者や保護者など園にかかわる大人の「やってみよう！」「やってみたい」という主体も大切にすることを表明している。

園の取り組み 「自分で考えて、自分で決めて、自分で動ける子」を育てるために

○保育者が子どもの育ちの芽を読み取るため、チーム力を高める

子どもの主体的な育ち（学び）を引き出すため、保育者が子どもたちの興味関心に合わせて多彩な環境を意図的に構成し、保育を展開していくことを心がけている。そして、保育者が子どもの興味・関心を含めた「育ちの芽」を読み取ることにより、保育者が子どもに「やらせる」のではなく、子どもが自らかかわりたくなる魅力的な環境や活動を創り出せるようにしたいと考えている。

しかし、保育者が子どもの思いや育ちを見取る力については保育者自身の経験知が重要な要素であり、若手保育者には難しい。日頃から若手が先輩に相談したり、お互いの実践事例を持ち寄って話をしたり、「育ち合う保育者チーム」となれるよう、トップリーダー層とミドルリーダー層がサポートしている。年5回の鈴木正敏先生（兵庫教育大学大学院 准教授）を招く園内研修でも、保育者個々の資質能力の向上だけでなく、チームとしての質向上に努めている。

いぶき幼稚園が大切にしている

「科学する心」が育つための学びのサイクル



いぶき幼稚園の「学びのサイクル」

当園では「幼児期の主体性を伸ばし、自分で考えて、自分で決めて、自分で動ける子」を育てたいと願っている。そして、「幼児期の主体性」を伸ばすために、園生活において保育者が指示的ではなく、対話的・応答的に関わりながら、子どもたちが力を発揮して、自分たち自身で考えたり決めたりする機会をできるだけ多く用意することが必要だと考えている。

また、近年は、園生活の中で日頃から「考える（状況を分析する、相談する等）→やってみる（実行する、試す等）→振り返る（良かったところ、困ったところ、課題解決等）」という、仮説検証思考に似た「学びのサイクル」をたっぷりと経験できるよう、保育内容が全般的に変容してきている。

いぶき幼稚園流の「科学する心」と、それを支える保育者のかかわり

そんな当園では、「科学する心」を、**幼児が自分を取り巻く多様な環境（ヒト・モノ・コト）に自ら興味・関心を持ってかかわり、その中で自分のやりたいことを実現するために様々なやりくりや試行錯誤を繰り返す姿勢**を指すものだと考える。

まず、幼児が「自ら興味・関心を持って環境とかかわる」ためには、物事に対して受け身的ではなく当事者性を持ってかかわる経験の積み重ねが大切になる。次に、幼児にとってのやりくりや試行錯誤の体験は、単に知識を獲得するのではなく、感性を働かせて育むことにもつながる。

前半部分について。前半部分は前述の「幼児期の主体性」を伸ばすことと通ずるものがある。

一般的に「主体性」という言葉は、「あらかじめすることが決められていない場面でも、自発的に自分自身ですべきことを考え、決める態度」として用いられている。類似する言葉に「自主性」が挙げられるが、こちらは「誰かに言われたことなど、あらかじめすることが明確に決められている場面で、それを積極的に行う態度」である。

当園では、この「主体性」と「自主性」の違いに留意しつつ、バランスのとれた保育を展開しようと努めている。それが先述の「保育者が指示的ではなく、対話的・応答的に関わりながら、子どもたちが力を発揮して、自分たち自身で考えたり決めたりする機会をできるだけ多く用意すること」として現われ、子どもたちが当事者性を持って物事にかかわる後押しをしている。

続いて後半部分。子どもが自分のやりたいことを実現するために様々なやりくりや試行錯誤を繰り返す姿勢。

当然のことだが、「幼児期の遊び」には、子どもの気づきや学びにつながる機会がたくさんあり、決して“ただ遊んでいるだけ”ではない。

例えば、遊びの中で「上手いかない」という問題にぶつかることがある。もちろん、大人が正解や解決法を提示した方が早く・上手く物事を進められるだろう。しかし、答えに早くたどり着くことが、必ずしも良いこととは限らない。

自分のやりたいことを実現するため、問題解決のために試行錯誤し、最短距離で正解へたどり着くのではなく、曲がりくねりながら考え抜いていく。その自発的な体験を通じて、子どもは感性を働かせて良さや美しさを感じ取ったり、不思議さに気づいたり、さらなる疑問を抱いたりする。そして、感じたり気付いたことに対し、できるようになったりわかったりした知識・技能を使いながら、さらに試したり、色々な方法を工夫したりしていく。

保育者はこのような営みを支えるために、子どもの「なぜ?」「どうして?」「どうしたらいいの?」という問いかけに対し、「調べたり、考えたり、相談したりする」活動ができるよう、子どもと一緒に考えることを大切にしている。

コロナ禍の「新しい園生活」を自ら築き上げていく5歳児の姿に、いぶき流の「科学する心」が…

今回取り上げる実践事例は、昨年のコロナ禍での登園再開から約8ヶ月におよび、新型コロナウイルスと感染症対策について考え続けた5歳児の事例である。

もちろん、8ヶ月間の中では子ども達の興味・関心が下火になる時期もあった。しかし、ふとしたことをきっかけにまた再燃したり、その子どもたちの「いま、ここ」の興味・関心を保育者が見逃さずに環境を整えたり、子どもと保育者が一緒に考え続けた日々の記録でもある。

新型コロナウイルスと「新しい生活」の登場に際し、子どもたちは大人から与えられたルールや考え方をただ受け入れるのではなく、「なんで?」「どうして?」という疑問を抱いた。そして、その疑問について調べるうちに、自分達の生活の中に起こった変化を自分事として捉えるようになり、自ら興味・関心を持って友達と協力し、より良く園生活が送れるように試行錯誤と工夫を繰り返した。

その子どもと保育者の姿は、まさにいぶき流の「科学する心」を体現していたと感じた。そのため、今回初めて応募するにあたり、この事例を用いることとした。

令和2年度5歳児そら組の実践事例より

～「新しい園生活」を自ら築き上げる5歳児の姿～

入園時から学びのサイクルを園生活の中で積み重ねてきた子どもたちが、令和2年度には5歳児になった。すると、コロナ禍が発生して誰も正解が分からない状況下において、6月の登園再開以降、5歳児そら組の子どもたちは、自らコロナウイルスについて調べ、クラス担任と一緒に感染症対策を考え、実行し始めた。

1. 新しい生活様式～withコロナって？から始まった1学期～

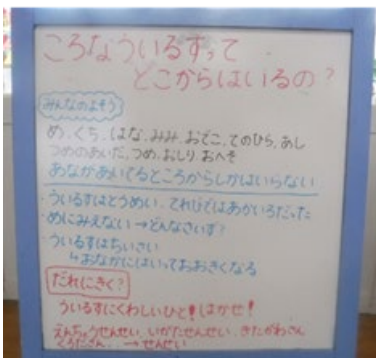
疑問の連鎖

6月15日～

①コロナウイルスってどこから入るの？情報収集の1学期の始まり

6月、自粛期間が明けそら組としての園生活がスタートした。子どもたちは幼稚園に行けない理由を自粛期間中に家庭で話をしており、「コロナウイルス」が原因で幼稚園が休みになっていることを知っていた。その時点では言葉として「コロナウイルス」を知っている程度だった。ある日、コロナウイルスのことを家で調べてきた子どもの発表をきっかけに、子どもたちの中にコロナウイルスへの興味が生まれた。

「コロナウイルスってなに？」という素朴な疑問から、「コロナウイルスってどこから人の体に入ってくるんやろな？」「なんでマスクつけないといけないの？」という疑問も出てきた。早速、疑問を解決するためクラスで話し合いを行った。その話し合いの中では、「体にある穴から入ってくるって！」「体にある穴ってなに？」「おでこのあなや！」「おでこにあなないやん！」と答えが出なかった。そこで「色々な人に聞いてみよう！」ということになった。聞く方法については、アンケートの形にすることになった。どんなことを聞くかの内容も、子どもたちで考えてアンケートを作った。



学びを支える保育者の姿

保育者は子どもの分からない、困った場面を的確に捉え、じっくり考え込める言葉かけや場の設定を行った。子どもたちのこれまでの経験で導き出せないことについては、方法や選択肢を提示し、決定権は子どもに委ねることを入園してからこれまでの生活の中で積み重ねてきた。

特に話し合い活動などは、子どもが思い出せるように子どもの意見やつぶやきを文字や写真で残すようにしている。ドキュメンテーションも、過程の足跡として保護者へ伝える手段だけでなく、子どもの記憶の保管としても活用している。

6月18日から「どこから入ってくるのか？」の話し合いを始め、6月22日にアンケートが完成し、保護者等に配布した。

アンケートでは、「からだのどこからはいつてくるのか?」「ころなういるすのおおきさはどれくらい?」について聞くことになった。

早速返ってきたアンケートを見ると、「どこから入ってくるのか?」の結果は1位「口」、2位「鼻」、3位「目」となり、「あ! やっぱり」と自分たちが考えた予想と同じで納得している様子があった。アンケートの結果から、日ごろから着用の声掛けがあるマスクの必要性についても納得がいった。



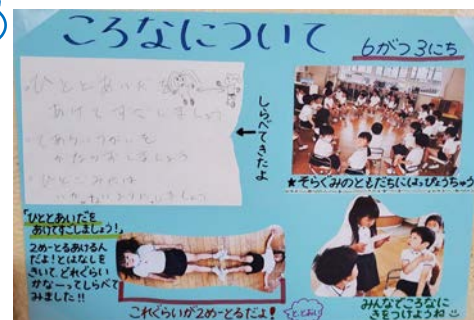
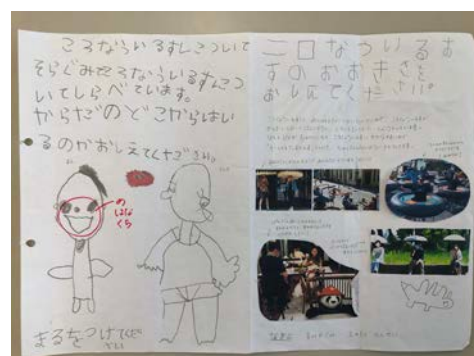
ウイルスの大きさを絵にしてくれたり、子どもが興味をもつのではと、距離を取る方法を書してくれた人もいた。子どもたちは毎日、何度もアンケートを読み込んでいた。

新たな関心

6月29日~

②ソーシャルディスタンスって何?

1. 子どもたちは日々、家庭でもニュースなどを通してコロナウイルスについて情報を得ていた。子どもたちそれぞれが持っている情報を発表し合い、保育者が記述して共有した。その中で「ソーシャルディスタンス」というワードが出てきた。コロナウイルスに罹らないようにするためには、2mの距離をあける必要があることを知った。「2メートルってどのくらい?」実際の2mを知ると、「2メートルあけるの無理じゃない?」「そういえば、アンケートに人と間隔をあけることを書いていたものがあったよ!」の声に、コロナ対策として“人との間隔”に興味を持った子どもたちは早速調べ始めた。その結果、隣の人と1mの間隔をあけるだけでも感染症対策になることを知った。それ以降、トイレの順番待ちなど日常生活の中でも意識して距離を保ち待つ姿があった。



2. ある日、トイレに行った子どもが、トイレの中の混雑と他クラスの友達との密着具合が気になり、「1メートルもあいてないな」とつぶやいた。周りにいた子どもたちもそのことに気づき、「1メートルってどれくらい?」「どうやって調べる?」と次々に疑問が沸いてきた。別の子どもがテレビで見た、傘をさして距離を保っていたことを伝えた。また、アンケートにあった色々なやり方でのソーシャルディスタンスの取り方に興味を持った。それ以降、傘を使ってソーシャルディスタンスが保てているか測る姿もあった。しかし、「自分の傘ではどうも短いのではないかな?」という、実体験を通しての疑問が生まれていた。

早速代わりになるような棒を探して回り、「ソーシャルディスタンス棒」をもって園内を調べて回った。

学びを支える保育者の姿

この時期の子どもたちは、日を追うごとにコロナウイルスに関する興味・関心が広がっていた。家庭でも調べ学習をしており、調べたことをみんなに発表することを繰り返していた。保育者は、子どもたちの発表を文字に残し、興味・関心が途絶えないように記録し保育室に掲示していった。

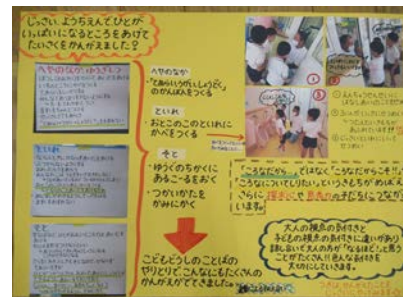
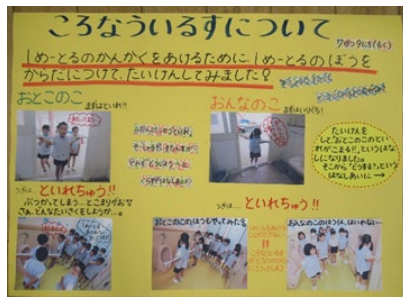
また傘を使用し間隔を取っている姿に、子ども達の気づきの多さや、「次はこうしてみよう！」といった調べたり考えたりする深まりを感じ、実際にやってみるものの大切さを実感した。

③トイレも安全な空間へ！

考えて、やってみて 7月9日～

ソーシャルディスタンス棒を用いて調べた結果、トイレの中でも、座ってするトイレは壁があるから大丈夫で、小便器には壁がないから危険だということになった。

どのような対策を取るか話し合いをし、①小便器の横に壁を作る②待つ人が立つ目印をすることになった。加えて、座ってするトイレは、上の方は開いているから、上を向いて咳をしないことも約束の一つにしようと意見が出た。



④壁を建てる！何で壁を作る？大きさはどのくらい？

これまでの園生活のなかで、製作や自由遊びを通して様々な素材に触れる経験を積んできた子どもたち。園にある資源を十分にそして存分に使いながら、自分の作りたいものを形にできた。

始めは段ボールで壁を作る予定だった。しかし、段ボールは紙でできているから、アルコールで消毒するとき濡れてやぶれるのではないかという意見が出た。昨年の生活発表会で劇の背景に使用した強くて軽い「プラスチック段ボール」で作ってみることになった。次に、壁の高さや幅を測り、どれくらいの大きさの壁が必要かを考えた。高さを決めるために、クラスで一番背の高い子どもに合わせてみたりと、感染症対策を意識して大きさを決めた。園内にあるプラダンを集めて回り、壁を作った。寄せ集めのプラダンだったので、作りたい大きさになるようテープで止めて整えた。できあがった壁をいざ設置してみようと、養生テープで固定してみたが立たなかった。保育者は、この壁を立てることは子どもたちだけでは難しいと考え、劇の背景を立てるときに使う支えを、「こんなものあるよ！」と提示し、子どもたちにどうするかを聞いてみた。

子どもたちは保育者の提案を受け、実際立ててみるとまっすぐ綺麗に、そして安定して立っている壁に満足し、すべての壁の設置が終わった瞬間、みんなでハイタッチをして喜んでいた。



みんなのために！

7月13日～15日

しかし、別の問題が発生した。3歳児は本当の壁だと思い手をついて倒してしまうことがあった。それは危ないから「3歳児の小さな友達にも分かるようにするためには？」、という課題にも試行錯誤しながら取り組んでいった。

3歳児クラスの子どもたちにどうしたら伝わる？

- ・言ったらいい→トイレにずっとおらなあかん（ずっとはいれない）
- ・書いたらいい→字を読めない子がいる（毎回読んであげるのも無理）
- ・写真はどうか→字を読めない子でもわかるね（絵もいいね！）



園舎内を調べ終わったあと、園庭の遊具に注目した子どもがいた。アスレチック（総合遊具）はたくさんの人が触って遊ぶから、ウイルスが付いているのではないかな？ままごと用のおもちゃや砂場のスコップもたくさんの人が触るよ！という話になった。

園内の余っているアルコールポンプを集めてまわり、園庭の遊具や砂場などみんなが使うところにアルコールの設置を行った。



5歳児さんの
真似をして！

トイレの壁の消毒
も忘れずに！

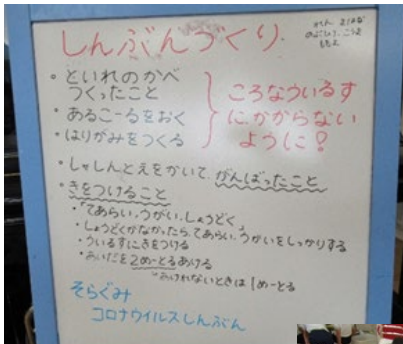
アルコールは太陽に当たるとよくないから、毎回片付けよう！
涼しいところに片付けよう！

学びを支える保育者の姿

トイレの壁作りでは、プラダンを持ってトイレに行き、実際に必要な幅や高さを測って大きさを決めた。保育者は、子どもたちの発言を待ったり様子を見守り、タイミングに合わせて次の素材の準備など、思いを形にできるように手助けした。出来上がった後も、自分たちで作ったからこそその壁を大切に作る姿があった。

3歳児への対応については、子どもたちの思いやりやいたわりなどを、子どもたちから出てくる言葉で感じることができ、心の育ちを感じることもできた。また、自分たちの思いを形にしようと、試行錯誤する姿から学びのサイクルの定着を感じた。

⑤「そらぐみ コロナウイルスしんぶん」



みんなに伝えたい！

7月17日～21日



コロナウイルスの対策に取り組み始め、気付けば1学期も終わろうとしていた。

コロナウイルスについての取り組みについて、「頑張ってきたことを伝えたい」「どんなことをしたのか知ってほしい」という思いと共に、夏休み中もコロナウイルスへの対策を忘れずして欲しいことを伝えたいという意見が出た。

どのように伝えると分かりやすいのかという、伝え方をクラスで話し合った。様々な意見が出た中で「新聞を作ってみよう！」という結果になり、新聞係を作った。

新聞係を中心に、各チームに取り組んできたことをインタビューし、記事にする内容を集めて回った。

当園では、園生活の中で文字への興味や関心を持ったり、自然に文字に親しめるような環境作りを大切にしている。子どもたちは新聞作りを通して自分たちの思いを伝えたい思いから、文字を書くことに挑戦していった。「こうやって書くんや！」など、文字へ興味を持つ言葉も自然と聞かれていた。遊ぶ時間が短くなっても、自分たちで完成させたいと最後まで力を合わせて取り組んだ。

最終校正をして、できあがった原稿を見たときは「これでオッケー！」「やったー！」とハイタッチし、喜びと達成感を味わう姿があった。できあがった原稿をクラスの友達に見せると、「すごいやん！」「見せて見せて！」とクラス全体ができあがりを待ちわび、一緒に喜んでいた。

学びを支える保育者の姿

6月にコロナウイルスのことを調べてきた子どもの発表をきっかけに、クラス全体がコロナウイルスに興味を持った1学期だった。トイレで間隔をあけたり、手洗い・うがい・消毒の声掛けを行ったり、前に出るのが苦手な子も「やってみたい！」と思う場面があり、積極的に取り組む姿もあり、1学期を通して自分たちで考えて話し合うことで、対策しようとする意識が芽生えていた。

また、1つのことについてクラス全体で『考えてみよう！やってみよう！』と取り組んだことをきっかけに、一人一人が参加意欲を持ちながら小さなことでも試行錯誤を繰り返し友達と考えていく姿があった。保育者は、子どもたちの「もっと知りたい！」気持ちに寄り添い、子どもの行動の動機である、面白い、不思議などの感情を見逃さないよう、写真やドキュメンテーションなどの記録を残してきた。

「コロナウイルス」をきっかけに、子どもたちが興味・関心を持ったことを友達と試行錯誤する中で、社会生活との関わり、協同性や探求心、思考力、言葉による伝えあいなどたくさんの育ちが見られた。

2. コロナウイルスから始まった興味・関心の広がりは2学期でも！

①アルコール台を作りたい！

手洗い、うがい、アルコールが当たり前になっていた7月中旬、「アルコールスプレーのポンプは、色々な人が触って押すから汚いんじゃない？」という一人の子ども発言をきっかけに、新たな興味と関心へ移っていった。「スーパーに、足で踏んだら出るアルコール台があったよ！」という他の子どもの声に「足踏み式アルコールスプレーって作れるんちゃう？」と意欲が湧いてきた。買ってすませるのではなく「自分たちで作る！」という姿に、できるかどうか分からないが保育者自身も子どもたちのチャレンジを応援しようと、一緒にどうやって作るか、どうしたらできるかを考え始めた。アルコール台の制作の始まりは、「小さな小人が中に入って押している」というなんとも子どもらしい発想からだった。アルコール台の制作にはここから3か月をかけて、子どもたちの興味が高まったときに取り組んでいった。

夏休みが明け運動会が終わり、10月中旬の芋ほり遠足の時期になった。その農園には、足踏み式アルコールスプレーがあることを保育者は事前の下見で把握していたので、遠足の話をする際子どもたちにそのことを伝えた。遠足当日、子どもたちの目当ては芋ではなく、足踏み式アルコールスプレーを体験することだった。足踏み式アルコールスプレーを楽しみに待つ姿は、1学期から興味や関心を深めてきた今年ならではの姿だった。

どうしても足踏み式アルコールスプレーを作ってみたい子どもたちは、10月下旬園長先生に頼んでアルコール台を購入してもらった。そこには本物を見て研究し、構造を解明したい子どもたちの願いがあった。アルコール台が届くと、子どもたちはどうしたらアルコールが出てくるのかを、何度も押して解明しようとしていた。

しかし何度試しても、ペダルを踏んでアルコールのポンプを押す動きにつながる仕組みが分からなかった。見本のアルコール台を研究し始めると同時に、子どもたちは家でも作り方を調べるようになった。

情報収集 10月16日～



アルコール台の制作に取り組むことを保護者の方にお知らせすると、設計図を引いてくれたり、模型を作ってくれたり、保護者も協力してくれた。特に模型は、中の構造が見えるように作られており、内部の動きが分かるようになっていた。

ペダルを踏むと、ポンプが押されアルコールが出る仕組みの解明が始まった。アルコール台の動きの連動の鍵は、中にあるバネだと考えた担任は、そのバネの存在に気付くまで辛抱強く子どもたちの気づきを待った。しかし何度ペダルを踏んでも、子どもたちだけではバネの存在に気付くことができなかった。足で踏むことの動きとポンプを押す動きの連動が分からなかった。



保育者は、子どもたちだけでは解決することが難しいと判断し、制作に必要な材料の見本を準備した。その中に“押しバネ”と“引きバネ”を準備し、子どもたちに使う材料として提示した。子どもたちは様々な形の木材や部品を見て「なんのために使うんだろう？」と、見本のアルコール台や模型のアルコール台を見比べ、材料の木材や部品を何度も組み立ててみたり、バネの動きを確かめていた。この模型と見本のアルコール台のペダルを何度も繰り返し押すことで、バネの連動が分かり始めた。自分たちで作れるのでは？と少し見通しと自信が持て、早速制作に取りかかった。

念願の！

11月19,20日

よし！作ってみよう！！

板を組み合わせてみて・・・

色々試してみたけど、難しい・・・

どうしたらいいの??

・・・

そうだ！こういうときは助けを呼ぼう！

「園長先生！一緒に作って！どうしたらいいの？」



「ここはこれくらいの長さで、
こうしたいねん！」

スライドソーや電動ドリルを
使うのはドキドキしたけれど、
めっちゃ面白かった！！



実際足で踏んでみると、「あー!!こうなるんか!!」「(踏みながら)なる
ほど!!横に釘がある!!」「これはギュってなるから押しバネかな？」



材料を組み立てながら、念願叶ってやっと作れることに子どもたちは終始興奮気味だった。やりたい作りたい気持ちが強すぎて、自分の意見を通そうと譲れなかったり話が聞けない姿があった。しかし、少しずつ形になっていくアルコール台に、みんなと協力し、声掛けしながら役割分担をする姿が次第に見られていった。制作に携わった子どもたちの名前をアルコール台に記名し、完成した。

②「いぶきわくわくフェスタ」とは？

平成 30 年度より、秋の恒例行事である音楽会を文化祭「いぶきわくわくフェスタ」へと進化・発展させた。これまでの音楽会の取り組みでは、譜面という正解に向かって合唱や合奏の反復練習を繰り返すことが中心だった。フェスタの取り組みでは、運動会の取り組みを通して培ったクラス内の友達や保育者とのつながりを生かし、子どもたちが保育者と一緒に考えた「やってみたい！」を実現することを中心とした。子どもたちが主体となって、自分達が「やってみよう！」と思ったこと、「これをやりたい！」と実現にこだわったこと、保護者を含むお客さんに「見て見て！」と見せたくなったことなど、子どもたちの「遊び」と「学び」と「思い」を中心に構成されている。

令和 2 年度は 3 回目を迎え、お店屋さん、テーマパーク、ステージでのショー・ダンス・楽器演奏等の披露など、子どもたちの思いあふれる遊びの祭典へ、保護者が一緒に参加する行事となっている。

作ってみたい！

10 月 15 日～

③本物みたいなマスクを作りたい！

運動会が終わった 10 月中旬頃から、お店屋さんごっこ・いぶきわくわくフェスタに向けての取り組みが始まった。

初めのうちは、自由遊びで作った物を机に並べて、クラスの友達や通りがかった保育者に声をかけ、「売る・買う」のやり取りを楽しんでいた。次第に“もっとたくさんのお客さんに来てほしい”と思うようになり、館内放送で他クラス・他学年に呼び掛けたり、誘いに行ったりする姿が見られるようになった。すると、「これ売るためにこんなものを作りたい！」「お客さんにこれをあげたら喜ぶんじゃない？」など、様々なアイデアを生みだすようになった。そして、保育者がそれらを実現するために必要な物を用意することにより、お店屋さんごっこのイメージがどんどん広がっていった。

話し合いを重ね、次々に生まれるアイデアを試したり振り返ったり、役割分担を考えたりしながら進めていった。

そら組では、1 学期からコロナウイルスについて興味を深めてきたことがきっかけで、2 学期はマスクに興味を持ち作り始める姿があった。数人の子どもたちから、「フェスタでどうしてもマスク屋さんを開きたい！」という声上がり、クラス満場一致でマスク屋さんを開くことが決定した。

お店屋さん開店までの過程には、「どうしたらお客さんが喜んでくれるのか？」「楽しい！買いたい！と思ってもらえるにはどうしたらいいか？」という、お客さんの思いを大切にしながら進める姿が見られた。

④1日の大半をマスク作りに費やす日々

試行錯誤を繰り返す 10月22日～11月6日



1. 最初は身近な素材である折り紙とスズランテープで作り始めた。しかし、折り紙のマスクでは「息ができない」ということで、不織布に変えて作った。子どもたちの“厚いほうが良さそう”というなんとなくの感覚で、不織布を重ねてテープで貼り付けた。

「ゴムがすぐとれる」「テープが顔に当たってかゆい」などの意見が出てきて、どうやって重ねた不織布をつけるか？ゴムをどうやって不織布とつけるか？という課題になった。テープを布の間に挟んで皮ふに当たらないようにしてみたり、のりにしてみたりしたが、接着するためのテープ問題はなかなか解決しなかった。



2. 接着方法の解決のために、テープを使わないでできるマスクを考えてみた。不織布を使って、ウレタンマスクの形を見本にして切ってみた。形はそれらしくできたが、着用してみると顔に密着せず緩かった。加えて不織布1枚だと薄すぎて口元が見えてしまった。それではウイルスが入ってきてしまうということで、不織布は2枚重ねて作ることに決定した。しかし、本物のように作りたい子どもたちの中では、まだまだマスクの機能を果たしていない結論になった。そこで市販の不織布マスクを解体し、どのような構造になっているか調べた。



3. 本物のマスクには鼻の部分に針金があり、隙間がなくなるようになっていたことが分かった。何か代わりになるようなものがあるかと探したときに、父の日のプレゼントのラッピングに使った、ラッピング用針金を思い出した子どもがいた。早速試してみると、本物そっくりの密着具合に大喜びする姿があった。

ゴムの付け方については、「ホッチキスで止めたら芯が顔に当たって危なくない？」との声が出た。テープで芯を押さえてみる？でもとれてしまうことを考えるとやめたほうがいい。と、お客さんに安心して使ってもらうことを考える姿があった。子どもたちの本物みたいなマスク作りへの情熱は、ますます高まっていった。



4. テープの種類を変え、不織布を両面テープで接着してみた。不織布は接着したが、鼻の針金の部分が気になった。むき出しの針金だと「直接当たったら痛いよね。」と、どうしたら皮ふに直接当たらないようにできるのかを考えた。



5. 鼻の針金の部分は、内側に折り込んだら顔に直接当たらないが、見た目が本物のようではなく、納得していな様子があった。
また、ゴムの付け方もどうしても納得がいかなかった。ホッチキスの芯はどうしたら隠れるんだろう。と、見た目と着け心地にこだわって作ろうとする姿があった。



6. 針金は不織布の間に挟み込んだら直接顔に当たらないことを発見した。ただ、最後までマスクのゴムの付け方の問題が解決しなかった。ホッチキスではだめだし・・・いくら考えてもいい方法が出てこなかった。そこで、ゴムの付け方について保育者から「穴を開けてゴムを通してみるのはどう？」と提案してみた。子どもたちからは「本物のマスクは穴あいてない！」と指摘があった。どうしても本物のマスクに近づける為に折りたたんで作りたいという強い思いがあったが、とりあえずやってみようと穴を開けてゴムを通してみた。
「いいやん！この方法がいいかも」と、想像していたものとは少し違う出来上がりにも驚きながらも、納得する姿があった。
ようやく納得できるマスクが完成すると、「せっかくならよく売れるマスクを作ろう！」と、今人気の鬼滅の刃は？小さい子にはアンパンマンじゃない？飾りもつけたらもっとかわいくなるねなどと、お客さんが着けたいと思ってくれるようなマスクになるように、こだわりをもって作り上げた。商品として売ると色々な人が触って汚れるからと、袋に入れることになった。

学びを支える保育者の姿

話し合いの場面では、一生懸命役割分担しながら進めようとするが、周りの子どもの勢いに圧倒されたり、意見がぶつかったりすることで発表をしたくないと感じる子どもも出てくる。保育者は様子を見ながら、「今どこまで進んでる？」「〇〇ちゃん、何か思い浮かんだ顔してるけどどう？」など、みんなが思いを出し合えるよう工夫している。また、「今日はどこをどうする？」など、課題や目的を明確にすることで、話し合いの筋道が分かり、進めやすくなる。その他にも前日に「明日はどうする？」という投げかけで、活動への見通しを持たせた。

加えて保育者は、子どもたちの相互のやり取りから発展できるよう、一歩引いて見守ることを大切にしている。同時に、子どもたちのやってみようを支えるために、保育者は子どもたちの言葉に耳を傾け、思いに寄り添うことも大切にしている。しかし、子どもたちの中にはアイデアが溢れるあまり、意見がぶつかる場面も見られたり、思っていることを十分に出し切れなかったりすることがある。そのような場面では、保育者が仲介に入り、子どもたちの話の交通整理をすることで新たな遊びの深まりへと繋げていくことを意識した。

マスクの生産性をあげるため、役割分担をし、流れ作業でマスクを作り上げていった。

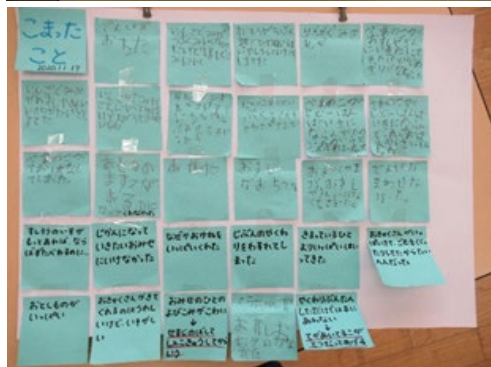
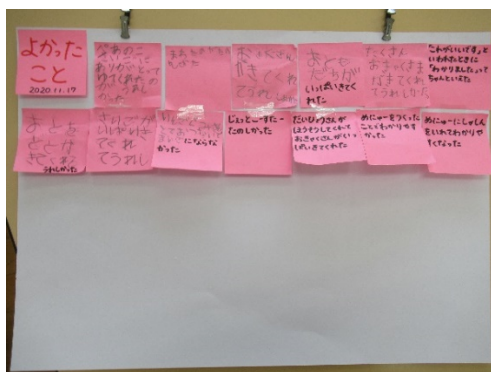
また、当日は「マスクを作っているところは裏方の仕事だから見られたくない」と、マスクを作る子どもたちは売り場の後ろでこっそり作っていた。



グループでの話し合いでは、子どもたちの中で司会役を決め進めていく。字を書ける子どもは書記役をしたりと、役割分担する姿が見られた。



学びを支える保育者の姿～付箋を使った振り返り～



お店屋さんごっこではお客さんとして、他の店舗のことや、活動するチームで困ったことやよかったことを出しあい、付箋に書いて発表した。

この付箋を使った振り返りのやり方は、園内研修で取り入れているもので、保育者自身がやってみてよかったから、子どもたちの話し合いなどに取り入れてみてはどうかという考えから始まった。

実際やってみると、みんなの前では発表が苦手な子どもも書くことで自分の考えや思いを伝えることができ、話し合いもより活性化するようになった。

いぶき幼稚園では日常の保育の中で、学びのサイクルに欠かせない、話し合いや振り返る時間を大切にしている。iPadで動画を撮り、客観的に自分たちを見てみたり、付箋を用いて他クラスの子どもたちや先生、保護者の方からコメントを書いてもらうことを、行事だけでなく、様々な機会に繰り返し行ってきた。

フェスタの活動の中では、お店屋さんとしての立場とお客さんとしての立場を入れ替えながら振り返りをした。また、他クラスや他学年からのお客さんとしての意見ももらうようにした。

繰り返し行うことで、自分の体験したことを伝えようとする姿や伝えたい思いが強くなり、付箋の枚数も多くなっていった。

3. 3 学期、1 年間の集大成！そら組みんなの思いを形に！！

①いぶき幼稚園の「生活発表会」とは？

いぶき幼稚園の生活発表会は、子どもたちがクラスの保育者や友達と力を合わせて作り上げていく劇遊びを中心としている。大人を喜ばせるために、大人が作ったセリフや衣装をお仕着せで与えて見栄えをよくしたり、均等な登場回数にこだわったりはしていない。あくまで発表会は子どもたちのために行われるものであり、子どもたちが自信をつけるための教育的活動だからである。

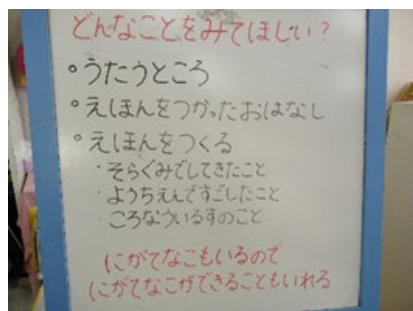
そのため、子どもたちが遊び学びの主体として、自分たちが「やってみよう！」と思ったこと、「これをやりたい！」と実現にこだわったこと、保護者の方を含むお客さんに「見て見て！」と見せたくなったことなど、子どもたちの「遊び」と「学び」と「思い」が中心で構成されている。

「子どもたちが1年間で学んだことやできるようになったことなどを披露し、保護者と保育者が一緒に子どもの成長を喜び合う機会」とし、子どもたちにとっては「自分たちの成長を認めてもらい、自信をつける場」として位置付けている。

生活発表会のねらい

「発表会で何をしたいのか？」「お家の人にどんなところを見てもらいたいのか」ということについて、クラスで目標を話し合い、子どもたちの“やりたい”という気持ちを大切にしながらすすめていった。保育のねらいとしては、「自分の力を十分に発揮しながら、友達とともに目的に向かって協力して作り上げていく楽しさや充実感を味わう」ことを大切にしている。

活動を進めていく中で、思うようにいかなかったり困ったり悩んだりすることもあるが、友達と一緒に最後まであきらめず継続して取り組む経験が、子どもたちに粘り強い心を育てるものと考えている。失敗からの学びを大切にしながら、科学する心を育てる「考える→試す→振り返る」の学びのサイクルを、生活発表会の取り組みでも繰り返し続けていった。



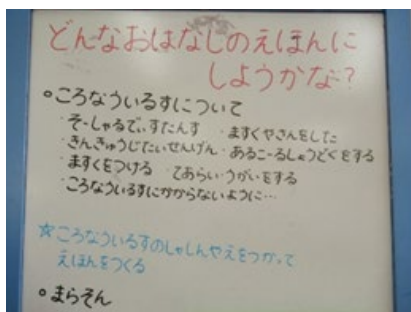
思いを形にするために！1月12～15日

②お家の人に何を見てほしい？

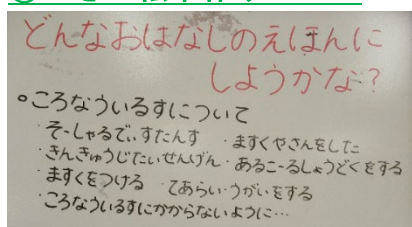
そら組では、いぶきわくわくフェスタに向けての話し合いで最後までお店屋さんの候補に残っていた“本屋さん（本作り）”が、12月中旬ごろから再び遊びの中で見られるようになっていた。保育者は「この遊びは発表会に繋がってくるかな？」と様子を伺っていた。

3学期になり、「生活発表会でどんなことをしたいのか？」を子ども達と話し合った。すると「歌を歌いたい」「劇がしたい」「自分たちで絵本を作ってみたい」という意見が出てきた。





③いざ！絵本作りへ！！



まず絵本を作るために、どんな話を作っていくのかを話し合った。子どもたちから出てきたのは、「そら組皆でしてきたことを絵本にしたい！」「コロナウイルスについて調べてきたことを発表したい！」という意見だった。

これまで“コロナウイルス新聞・保育室の掲示物・クラス便り”などで、保護者の方には伝えてきたが、「最後に自分達の口、言葉で伝えたい！」という子どもたちの思いがあった。

保育者としては、コロナについての取り組みは、これまで保護者に機会があるごとに伝えてきたので、違う題材で取り組む子どもたちの姿も見えて欲しいという思いがあった。しかし、何日間かけて話し合いを重ね、子どもたちのブレない強い意志を感じ、「その思いを叶えよう！支えよう！」と、一緒に土台となる内容を考え始めた。

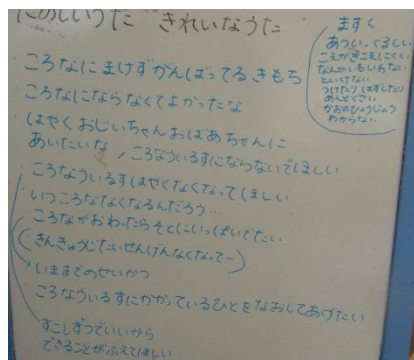
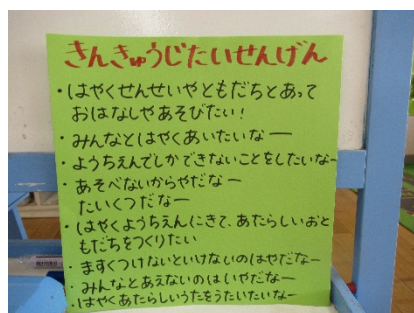
1

体験したことを伝えたい
1月19日～



子どもたちの参考にならないかと、絵本を探して読み聞かせをした。

テーマが決まると、まずクラス全体でどんな話の流れにするかを話し合った。「緊急事態宣言が出たところから始めよう→トイレの壁を作った話と、新聞作り→アルコール台を作った話→2回目の緊急事態宣言→これからもコロナウイルスに気を付けてね！終わる」と次々に意見が出てきて、クラス全体でもイメージが広がった。



まず、“緊急事態宣言”が出たときの気持ちを出し合った。この1年間コロナウイルスの影響により、たくさんの制限があった。その中で、子どもたちの今の状況を理解しようとする気持ちの一方で、今の生活に対するモヤモヤする気持ちを持っていた。

園が再開した6月から、園内ではできるだけいつも通り、やりたいことをできるようにと保育者も取り組んできたが、子どもたちの小さいながらに感じていた葛藤を知ることができた。そんな自分たちの思いを言葉にし、表現しようとする姿に、モノ・ヒト・コトに自ら興味・関心を持ってかかわりを持ち、受け身ではなく当事者性を持って物事にかかわっていく姿勢に、いぶき流の科学する心の育ちを実感した。

1. 松永展明 監修 せべまさゆき 絵

「どうしてしんがたコロナになるの？」 2020年 金の星社

近藤えり 作・絵 「コロナウイルスのころなっちとぼく」

2020年 チャイルド社



次は絵本作りへ。絵本チームを作り、“どこで、どんな台詞をいれるか”“登場人物”“伝えたい思い”など、具体的な話を考えていった。

絵本チームで決まったことを、「クラスの皆に舞台で見せてあげたい」「これでいいか皆に聞いてみよう」と、場面が決まるごとにクラスで共有していった。クラスの友達から「いいと思う」「上手にできているよ」と励ましや認め言葉の言葉をもらったり、「こんな台詞入れてほしい」「こうしたらもっと気持ちが伝わりそう」とアドバイスをもらいながら作り上げていった。

それだけではなく、自粛期間に感じた気持ちも振り返り、幼稚園に来て友達と遊べる嬉しさや喜びなどの気持ちも考えた。

伝えるためには？1月28日～

④ どうやって役になりきる？



劇の内容は決まったが、子どもたちが難しく感じたのは“役になりきる”というところだった。そら組がやろうとしていることは実体験を表現するということから、自分たち自身を再現することに戸惑いを感じているようだった。

“どう表現すると伝わるのか？”の課題には、舞台の使い方やお客さんからの見え方にもこだわりながら、場面ごとに見合いっこをし、「自分が怒るときは・・・」「あの時の気持ちは・・・」と、見る側と演じる側に分かれて、お互い一緒になって考える姿があった。

「話をするとき、テンポよくした方が本当に話しているみたいになる」という気づきから、小グループに分かれて言葉のやり取りを何度も試した。

子どもたちは生活発表会に向けて学びのサイクルを繰り返しながら作り上げていった。今年度は制限の多い生活の中で「嫌だな」と感じることも多くあったが、そんな中でも前を向いている気持ちが表現されていた。保育者が想像していた以上に子どもたちは身の回りに関わる事象について感じ、考えていたことを知った。そのような色々な思いを、劇の最後に歌う歌詞に込めた。

『RAIN』 作曲：Nakajin, Fukase&Saori

しんがたころなういるす はやりはじめた ともだちと あえない いえのなかですごした
ますく いやだな くるしい つけるのめんどくさい かおがみえない こえもきこえにくいんだ
おじいちゃんや おばあちゃんに あいたいな げんきでいるかな
ころなういるすは いつまでつづくの もとのせいかつにもどりたいな
これからさき かぞくや おじいちゃん おばあちゃん ともだち みんな
ころなういるすにならずに すごしていきたいんだ
きんきゅうじたいせんぜん はやくなくなってほしいんだ だから いまはもうしこしがまん
いまできることをしようよ いつか もとのせかいにもどるみらいを ゆめみてるんだ

生活発表会当日は緊張している様子もあったが、それ以上に自分たちで作り上げてきた劇を保護者の方に見てもらえることを楽しみにしていた。劇中も、子どもたち同士で助け合い支え合いながら進めている姿があった。本番を終え、子どもたちには見てもらえた喜びや楽しさを味わい、満足感や達成感に浸る姿があった。

保育者は、常日頃園生活や遊びの中で偶然起こったことに対しても教育的価値を見出し、その機会を的確に捉え、それをどのように幼児へ体験させていくかを考えながら保育をしている。そこに、保育者の計画的で対話的・応答的な環境構成や援助が必要になってくる。生活発表会のねらいである「自分の力を十分に発揮しながら、友達とともに目的に向かって協力して作り上げていく楽しさや充実感を味わう」ことを達成するために、子どもたちが遊びこめる時間、環境を整え、その原動力となる子どもたちの「明日もやりたい！」気持ちが途切れないうち支えてきた。

また、子どもたちの中に「やればできる！できなくてもできるまでやってみる！」という意欲や諦めない気持ち、粘り強さを育むために、それらを支える「友達となら！」できる、がんばれると思えるような集団作りを行ってきた。

また、子どもたちの考えや意欲を保育者が受け止め、子どもたち自身が考え続けられるよう活動を展開した。保育者が子どもたちと対話的に関わりながら一緒に考え続けた絵本作りの話し合いや劇作りを通して、子どもたちの協同性・思考力・言葉による伝えあいの育ちが見られた。

まとめ

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、“with コロナ”という合言葉と共に、「新しい生活様式」に乗っ取った「新しい園生活」でのスタートだった。得体のしれない存在に世界が不安を募らせ大人が混乱し、子どもたちの集団の中で育つ機会が失われてしまっていた。そのような状況でも子どもたちの適応力は高く、新しい生活様式にも順調に慣れていった。「コロナだからできない」ではなく、「コロナでも（コロナだから）できること」を、保育者が子どもたちと対話的にかわりながら一緒に考え続けてきた。そこには、成長の歩みを止めない子どもたちの「いま・ここ」を生きている姿があった。

そら組の子どもたちは、保育者と一緒に感染症対策を考えながら実現していくことで、新しい園生活に当事者性を持ってのぞみ、「環境を大人から与えられて受け身的に生活する」のではなく、自分事として捉え、「自らが主体的に環境を変えていく」ようになっていった。まさに、いぶき幼稚園が考える「科学する心」の育ちの姿ではないだろうか。子どもたちは友達や先生と対話をする中から気づきを得て、試行錯誤しながら取り組むことを繰り返し経験してきた。

子どもたちの育ちを支える保育者は「どうして？」「なんで？」など、子どもたちの疑問や不思議に寄り添い、一緒に考えることを大切にしてきた。また、子どもたちの試行錯誤を支える原動力になる、「興味・関心」を大切にしながら、経験できる環境を作っていた。保育者は日々の保育の振り返りの中で子どもの姿を読み取り、また他の保育者からの違う視点や解釈も聞きながら、明日以降の保育の計画を見直しやってみて、また振り返ることを積み重ねてきた。保育者も悩みながらの1年ではあったが、この事例検証をすることで例年通りではない環境の中でも育っていく子どもたちの力強さを感じることができた。

課題と展望

～保育者として子どもの育ちを支えるために～

いぶき幼稚園では、「面白い!」「やりたい!」「もっと遊びたい!」という自発的な気持ちと行動、友達と対話を重ねる経験、これらが上手い出来ないことにも諦めず挑戦する力を育てるものとする。そして、「友達と一緒に学ぶことっておもしろいな!」という気持ちにつながっていく。さらに、友達と互いのイメージを共有し、考えをすり合わせ、“どうしたらもっと面白くなるか”と考え続ける中で、思考力や継続する力が育っていくと考える。

そら組の子どもたちは、日々の生活の中でやりたいことを実現するために試行錯誤を繰り返しながら「新しい園生活」を自ら築き上げてきた。「コロナウイルスって何なん?」という素朴な疑問から出発し、その疑問を解決するために自ら進んで調べたり考えて解決してきた。自分が知ったことをクラスの友達と共有し、新たな視点や違う見方から生じる「なんで?」「どうして?」にも試行錯誤し解決してきた。その過程には、自分達で考え、遊びや環境を作り上げていく経験を重ねてきた子どもたちには、「大人に決められたことをするのは物足りない」「自分たちで進めていくのが楽しい!」というような、子どもたちの主体的・対話的な姿があった。

そら組の子どもたちの姿には、当園の考える「科学する心」である「幼児が自分を取り巻く多様な環境（ヒト・モノ・コト）」に自ら興味・関心を持ってかわり、その中で自分のやりたいことを実現するために様々なやりくりや試行錯誤を繰り返す姿があった。

保育者は、このように大切な学びや育ちにつながる機会を多く持てるよう、話し合う体験を増やしたり、子どもたちで活動を進める機会を作るなど、なるべく一歩引いて見守ることが子どもたちの主体的・対話的な姿を引き出すことを実感した。しかし見守るばかりでなく、必要に応じて子どもたちの話の交通整理をしたり、さらに話し合いが深まるように意図的な声掛けのタイミングを逃さないようにする大切さも再認識することができた。

そら組の実践で見られた、友達と試行錯誤しながら課題解決したり遊びを深めていくことを、今後も継続して園生活の中で経験できるように、それを支える園全体の保育者の質の向上にも引き続き取り組んでいきたい。

「科学する心」にある幼児期に育てたい「心の育ち」は目に見えにくく、その機微を捉えることは難しい。だからこそ、子どもの発達の見通しを持ちながら思いや育ちを見とることが大切な「子ども理解」をしながら保育をするために、保育者としての研鑽を続けていかなければならない。子ども理解の力を高めるため、日々の保育の振り返りなどで他の保育者と事例を通して語り、解釈すること続け、明日以降の保育計画に生かせるようにしていきたい。

これからも誰のための、何のための教育・保育なのかを常に考えながら、子どもたちの「いま・ここ」に向き合って保育をしていきたい。

代表研究者・執筆者：阿部 真由子
共同研究者：北浦 朱紗